

緒言

奈良は実に文化財に恵まれた土地だ。それはただその数が多いというばかりでなく、その内容にきわめてすぐれた文化性をもつていて、それが必ずといつてよいくらい吾々の心をゆさぶるに足る特性をそなえているからである。ここに文化性というのは、その由緒や伝来における正しきであり、従つてその出来栄への好きなどを指すわけであるが、それはたしかに他の地方の文化財に比してかなりすぐれた内容といわなければならないだろう。例えば、どこかの寺の一つの仏像をとつてみても、それは間違いなく、その寺の或る堂の本尊であつて、その願主なり作者なりもかなりよく判つて、その造立の必然性がたしかめられるといつたような作例が多いからである。これは奈良国立文化財研究所としてまことに幸なことで、こんな文化財にとりかこまれている吾々は、いつも張り切つて、そして楽しく仕事をしているわけである。従つてこの研究所はいろいろな面できわめて貧弱なものでありながら、その研究成果にはかなり見るべきものを上げている。平城宮跡の発掘調査などはそのもつとも著しいものといふことができよう。しかしこの研究所の仕事は、ただ平城宮研究だけではないことはもちろんで、この三十七年度における業績にも、この冊子に述べているように、或は南都七大寺の一つの西大寺の絵画や工芸の調査並に研究、或は平安京の重要寺院である西寺の発掘調査、或はやはり奈良の名刹の一つの唐招提寺の古文書の研究、更に庭園関係の小堀遠州の資料収集など、実に注目すべき幾つかの研究をやつているのである。そしてそれぞれにある程度の成果を上げていることは、じゆうぶんに見ていたゞけると思う。

なおいつものことながら、これ等の研究がそれぞれの成果を上げ得たのは、何んといつても、これ等の研究対象になつたところの方々の心からなる御協力によることが大きかつたと思う。ここに厚く御礼を申し述べる。

昭和三十八年五月

奈良国立文化財研究所長

小

林

剛